

手塚治虫作品集『銀河少年』

萩原 義雄

長編冒険絵ものがたり『銀河少年』という作品は、手塚治虫作品中、漫画らしくない絵本仕立てから始まり、次第に漫画のコマ割作品になっていく一風変わった作品なのである。始まりは「荒原とオオカミのものがたり」で、書き出しは、

- 雪解け道をトロイカ(三とうだての馬車)がシヤランシヤランとはしつていきます。
- ふしぎなことに馬はたった一とうきり。
- それよりふしぎなのは、馭者も客ものっていない、郵便ぶくろがひとつっきりの、からつぼの車なのです。

○ここはカナダの北、クスカというちいさな町。

○二百人ほどの人が木をきってくらしている町。

○交通がふべんで、郵便なんか、たいていトロイカではこんでいます。

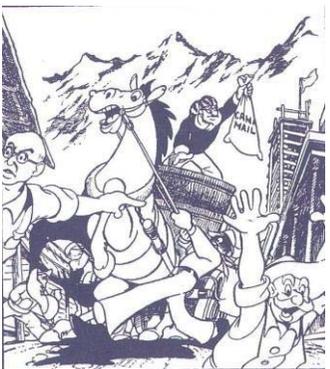
という具合に、この物語の情景描写を短い文六つ連ねて説明しています。その次に、

「オオカミだ、まえとおなじやりくちだ！」

○馬車のなかをのぞいた赤ひげの男が、かお色をかえてさげびました。

「馬車がまたやられたぞッ！」

ここまでが(1)の文章です。そして絵は、



◆暴走して町になだれ込もうとする馬の口を手綱を両手で抑えて裁こうとする男の姿を中央に、赤鬚の男は右隅に描き、眼鏡をかけたスキンヘッドの男が指で指し示し左側に描き、最も注目したいのは馬車の屋根の上に立ち、左手に「KANAMAIL」という布囊を携えた黒シャツの精悍な男を描きだしているのです。こうしてみると、実に迫力のある一コマのシーンを描きだしています。

いよいよ、全体を見ていくのですが、作品題名である『銀河少年』の主人公が登場するのは第二回以降となり、第一回は荒原に生きる狼の群れ二、三〇〇頭、そのボスのウル(手塚は、「指導者」ということば表現で紹介しています。(2))

○指導者の地位につくために、ウルは、なん十とうもなかまをころしていました。

〔(3) 6頁〕

○「おれのたべるあいだ、近よったやつは、ころしてやる」〔(8) 8頁〕

○「さっさと、くたばるがいいや。まだ食物にあきたらないやつらが、いっぱいいるんだぜ」〔(10) 9頁〕

○「プーケのあかんぼうをつれてこい」〔(15) 11頁〕

という狼の群れを率いるウルは、戦闘力・統率力に満ち溢れた指導者であることは間違いないのですが、ここで手塚が設定したように、生きるためには仲間である群れの狼を殺害しても何とも思わない狼なのです。では、群の狼たちはウルをどのように見ているのかといえば、

○チガーは、そっとプーケにささやきました。「ひどいやつだ。いまにだれかの手でせいさいされるだろう」〔10〕9頁〕

○チガーが、ただならぬようすでやってきました。「ウルが、ゆうべ、ふたりもなまをころしてたべてしまったとき」〔11〕9頁〕※「共食い」

この群れのなかに、雌狼で子を宿したプーケがいます。やがて凍てつく大平原を南へ南へ移動するある日の朝草むらで子どもを産みます。子どもはブウ〔12〕10頁〕となづけられます。群も移動していくうちに三〇頭に減っていきます。こうしたなか、ウルはプーケの子ブウを狙いはじめます。そこで母子狼はウルの子ブウを見限って逃亡します。

○「ぼうや、おかあさんはかんがえたのだけどね、つぎの休けいするとき、ふたりでにげましょう。これだけのなかまでは、たべものもろくろくいきわたらないからね」

〔14〕10頁〕

親子は逃げるのですが、ウルに追いつかれとうとう追いついたウルは、物も言わずにプーケを咬み倒すのです。子どもの「ブウは、キャン！、キャン！ と、ひめいをあげて、谷へころげおちました」

ここで、銃を携えた人間（Ⅱ「少年」）が登場してきます。ここで次号という運びで、隅枠に予告文「◎銃をかまえた少年は、だれだろう?! いよいよ、おもしろい氷原ものがたり!! 五月号から色刷りになります!!」と見えています。

《閑話休題》

ここで注意しておきたいのですが、第一回では「手塚治虫作え」、次の第二回から第一〇回までは「手塚治虫作画」、前編最終回すなわち第十一回は、「手塚治虫」とだけ表記されているのです。「作え」「作画」、そして「××」の最終回です。ここで「作え」と「作画」とではどうことなるのでしょうか。注意深く見ておくところでもあります。ご意見をお待ちしましょう。

『銀河少年』の構成

『銀河少年』は、第一回から第八回の途中まで「絵本」仕立てで運んで行きます。そして、この後、「漫画」と呼称されるにふさはしい内容へと変わっていきます。この変わり目こそが注意深く見ておく要所でもあるのです。とはいえ、それまでの「絵本」部分である前半部を讀解しておかねば、その解答も見つけられません。

(1) 「絵本」部分

少年の名は「ケンジ」、日本人の子どもです。大氷河が迫り来る大平原とは、カナダの山のなか、ここで少年ケンジと母親をボスであるウルに殺された狼の子ブウとが出会ったのです。

ケンジ少年は、この地では

○材木屋の親方にひきとられて、どなられたり、なぐられたり、「ニップ、ニップ」とばかにされながら「ぼくは日本の少年だぞ。つよく、りっぱに生きるんだ」と、がんばっていました。「第二回(3)」

という設定です。このなかで、「ニップ」という卑称語表現がどのような語源のことばなのか見ておきたいところです。この制作された時代、作者手塚はこのことばをどのように耳にし、知ってこの場面に取り入れたのか？国際文化交流を深めていく溝を埋めていくうえで当事者である東洋日本人はこのことばの意味を理會しておく必要があるのではないのでしょうか。西洋人の上から下へ見下す身勝手さがここに潜んでいるやも知れませんが、

このあと、アンダーソン氏のやしきであったジュリーの兄たち三人の少年から、
○「ぼくたちにあいさつしないのかよ。ヘイ、ジャップ」ケンジがあわてて立とうとすると、「ばか、日本流に、ゆかにすわって、手をついておじぎするんだ」ケンジは、むっとして、思わずくちびるをかみました。「第三回(12)」

○「すみません?…このきいらいサルめ！」かんとくがめちやくちやにケンジをなぐりつけているあいだに、アンダーソン氏とジュリーはみんなにたすけられていきました。「第五回(14)」
という場面もあります。

ここで「けなし語」表現を考察しておきましょう。

○「いけつ、このうまれそこないめ！」「第六回(8)」

この表現は、アンダーソン氏が自分の三人の息子たちに向けて病院のベッドで発話したところです。このように、ことばでは相手をけなししているのですが、状況を把握してこのことばを読み取らないとならない箇所でもあります。

話を先に進めていきましょう！

このあたりから、子狼であるブウの会話表現が見えてきます。

○「ウルだつ。ぼくたちのにおいをかぎつけて、なかまといっしょに、やってきたっ！」

「キャオーツ」…ブウは、ケンジにしらせました。「第二回(4)」

○「おかあさんのかたきをうって、ぼくをたすけてくれた、かわいい日本の少年。ぼくは、いま、子どもだけども、いつか、きつと、あの人にあうんだ。ねえ、おかあさん…」

この地球異変である「大氷河」のなかでの出会いは続きます。

○「アラスカからカナダをおそった大氷河は、森林をのみながら、しだいに南下しています。しだいに南下しています。カナダ北方の人たちは、すぐひなんしてく

ださい。このようなおそろしい天変地異に、当局ではもっか対策を考えています
が……」アナウンサーが、声をかぎりにさけびつづけけます。色をうしなつた市民の
むれは、ヘリコプターや自動車で、ぞくぞくにげだしました。「第二回（7）」

アンダーソン会社の社長の末娘ジュリー、そして手塚ここでこの氷河を一瞬に融かして
しまう原子爆弾の瞬熱を対処政策として用いようとしているのです。はつきり最初に断
っています。

○「だが、これが動物体にあたえるえいきようは、なんともうけあいかねますな。
放射線がカナダの原野を、しばらく人のすめない荒地にしてしまうおそれはたぶん
にあります」〔第二回（7）〕

○カナダの氷河事件のニュースは、もう全世界にひろまっています。ついに米国の
国防長官は、軍の人といつしよに、アリゾナの原子力工場をおとずれること
になったのでした。「WM一八号の性能は、いいだろうね」B36につみこまれる原子
爆弾を見おくりながら、長官はフィックス博士にたずねました。「しんらいできま
す。あつさ二百ポンドの氷のかべを、ちよくしゃで十秒でとかしてしまふほどです」
博士が、しんちようにこたえました。「第二回（8）」

と。大氷河を手塚は「大きな怪物」〔第二回（10）〕と表現します。この大自然の脅威れ
に人類が対処策としたのが及ぼした影響を子狼ブウはまっともに体験しています。被爆で
す。

○新型原子爆弾WH一八号を投下して、こっぱみじんにくだいてしまった。うんわ
るく、氷河のちかくにいたオオカミのブウは、氷のかげらの下じきなつてしまつた
のです。〔第三回（1）〕

「WH一八号の熱線が、あのなん億トンもある氷河をいっぺんにじゅーつとかし
てしまったのです。とけた氷が、つなみのように、どどどどと、あふれだしま
した。あたりは、またたくまに、どどうのあれくるう海のようななつてしまいまし
た。」〔第三回（1）〕

被爆したブウは、どうなつてしまつたのでしょうか。

○ブウは、たすかつたのです。でもからだは火のようにもえて、ひどいねつでした。毛
がたばになつてばらばらとぬけていきました。〔第三回（2）〕

○「ぼくのからだは……からだは……きいろくひかる！ ひかっている！」〔第三回
（8）〕※ブウを襲う獰猛なピューマも爪を立てようとした瞬間、湯気を立てて死ん
でしまう。枯木の幹はパチパチと木がこげて、黒い炭になつてしまう。

○みなさ、このへんなできごとはいったいなんでしょうか。これからあとおよみにな
るうちに、だんだんわかつてきます。〔第三回（10）〕

氷河はどうなつたのでしょうか？ ダドリ大尉は愛機の「はちすずめ号」で偵察します。

○「博士ですか。氷河が、またつたつたつていますッ。ヒロシマより復興がはやいで
すぞっ」〔第三回（5）〕

○「(前略) 氷河のやつ、家でも町でもモリモリかみくだいてのんでしまうんです。じぶんの町のきょうかいのとうがたおれていくのを見てゾーツとしたそうですぜ」〔第四回32頁〕

※「わたしやしてますよ。おいのりがたりなつかたんでさ。おいのりがね」(アンダーソンの車運転手会話)

(2) 「絵本」 漫画コマ枠式の部分第四回

漫画のようにコマ取りがなされていますが、会話部分を「フウセン」式にしている絵本式にとっています。ケンジは大切な学生帽(「いのちよりだいじなんです。おとうさんのかたみなんだから」〔第四回31頁15コマ〕)をめぐるアンダーソン家に関わる人たちと接触していきます。そう「交流」と呼ぶにはふさはしいシーンはみえませんが……。ただ、ジュリーだけは別です。「交流」と呼べましょう。

(3) 「絵本」 函枠式の部分第五・六回

アメリカ国ボストン市へと、舞台は移っていきます。

○「まあ、おききなさい。北のほうでは、なんでも金色にひかるおつそろしい怪物がでて、あばれまわっているってのはなしです。それがうわさによると、その原爆の放射能ってやつにあてられて、きがくるったオオカミだっていううですぜ」〔第五回



(3)

○「金色の魔獣あらわる! けさカナダ国境にちかいランザビルの町に、きかいきわまる怪物があらわれた。発砲したけいび員三名をかみたおおし、ゆくえをくりましたが、人びとはおそれおそれおのいている」〔第五回(5)〕

○「怪物をうちころすって、かけをしたんだよ」「め、めっそうもない。怪物はやけた鉄板のような火花をちらして、とてもちかよれるものじゃありません。くわばら、くわばら」

〔第五回(6) 36頁〕

○「黄金、いやプラチナせいだったかなそいつは、こんこそつかまえて宝石屋へうるんだハハハ」〔第六回(11)〕

○「うわーッ、黄金まじゅうだ!」〔第六回(15)〕

○「黄金まじゅうのことは、ワシントンの学界でも、わだいにのぼっていました。とうぜん、原爆第十七号のせきにしやである、フイックス博士は、みんなっからしつものあらしを、あびせられました。〔第六回(19)〕

○「黄金魔じゅうです。させきのしたへかくれていて、まちへきたのでとびだしました」。〔第九回23コマ90頁〕





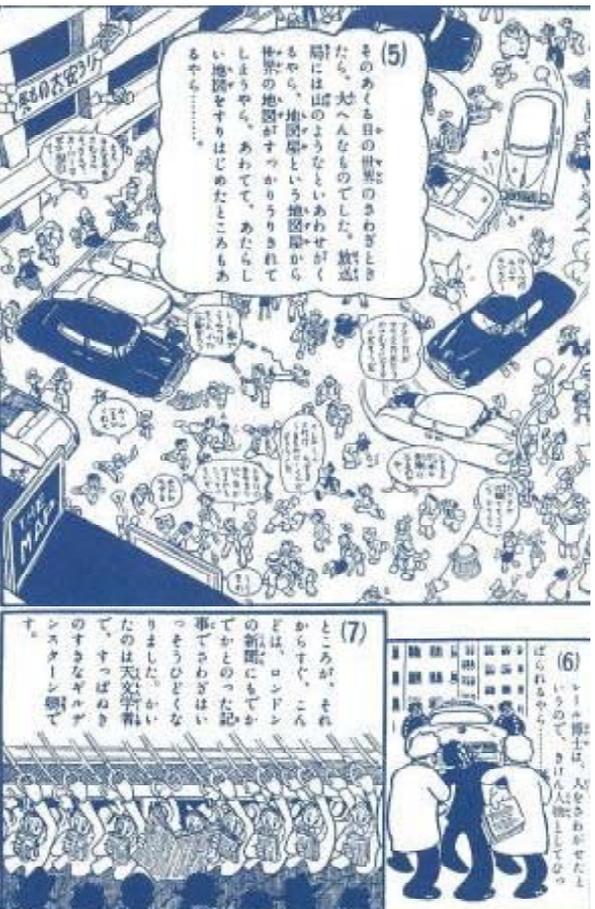
○「十二ストリートに黄金魔獣あらわる」(第九回25コマ 90頁)



○西洋人というものは、うでの力はあっても、こしがあんがい、よわいものです。「第六回(2)」

(4)「絵本」から「漫画」への変容部分第八回

ここで実はこのあと学ぶことになる「パノラマ画法」が既に用いられていることに気づきます。



上の図絵を見ていただき、手塚治虫さんの「パノラマ」画像の技法を湛然に見ていきましよう。会話には既に「フウセン」が用いられています。この「パノラマの風景画」は、日本古来の図絵に影響を受けています。その名を「鳥瞰図」技巧と呼んできました。鳥の目という言い方をすればわかりやすいでしょうか。上空から下を行き交う人々を見下ろしている画法です。手塚さん

はこの画像中に車と往来する人々の容子を事細か描き出しています。真ん中には筋立ての説明文章が雲形に置かれています。この内容を読み解いてみて下さい。

南極の海から突如現れた怪獣



(19) 恐ろしい怪物！
 みたこともない怪物！
 あなたがくわって来たので、あの船が船をうなでかえって、うまれてきたのでしょうか？
 みんなの知らないうちに食糧庫のさかななんかをたべて、げんきをだしてうごきはじめてましたよか。メリメリ、グワラグワラ、銃が紙のうらにひしやけてしまいました。
 ガーン！ ガーン！
 水夫たちは、むちゆうて、たまをあげせかけます。怪物は、たまよりもおとにびつくりしたらしく、シャアッ！ というようなさけびをあげると、海のなかにへにげようとした。
 そのひょうしに死が手すりにひっかかりました。

やがて、この怪獣と黄金魔獣（おうごんまじゆう）（オオオカミブウ）とが交えるときが近づきます。

ケンジは開拓団長として南極大陸に向かうことになる。



★前編おわり

前編 おわり

